

感染症発生動向調査

今月のトピックス

インフルエンザは、流行期に入り、増加中

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は、減少は見られるが、まだ動向に注意が必要

RS感染症の報告は、減少傾向

【患者定点からの情報】

市内の患者定点は、小児科定点：84か所、内科定点：55か所、眼科定点：15か所、性感染症定点：26か所、基幹(病院)定点：3か所の計183か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の13感染症とを報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計139定点から報告されます。

平成19年1月15日から平成19年2月18日まで(平成19年第3週から第7週まで。ただし、性感染症については平成19年1月分)の横浜市感染症発生動向評価を、平成19年2月22日に行いましたのでお知らせします。

<インフルエンザ>

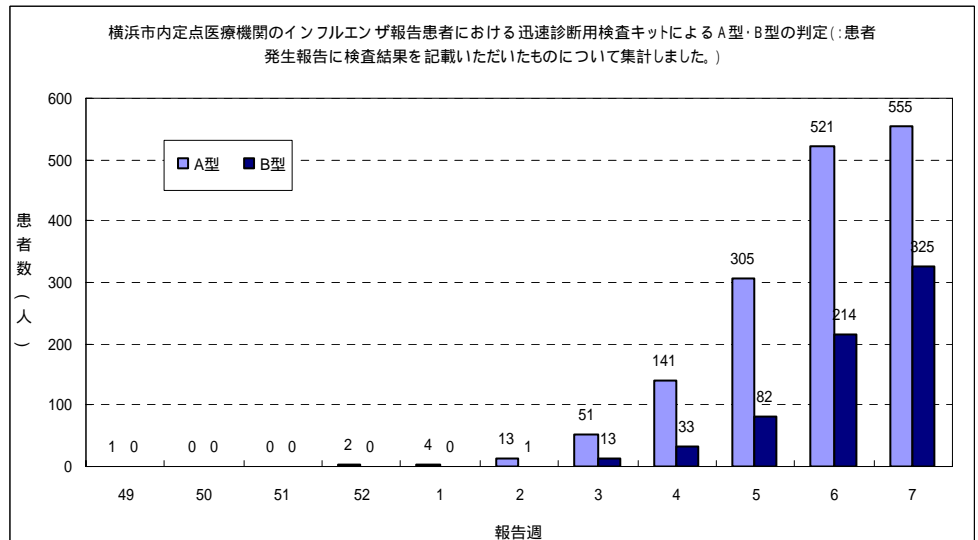
横浜市では、第4週に定点あたり1.69と、1.0をこえ、過去5シーズンと比べて一番遅い流行開始となりました。その後増加を続け、第7週は定点あたり9.22でした。区別では、第6週は6区、第7週は半数にあたる9区で注意報レベルをこえています。港北17.4、都筑16.4、瀬谷15.7で特に高い値でした。神奈川県(横浜、川崎を除く)は13.83、東京都は9.41と横浜より高く、川崎市は7.41と低い値です。全国では第3週に流行期に入り、その後も増加を続けており、第6週で定点あたり9.95でした。今後の動向には注意が必要と思われます。

横浜市内の病原体定点の検体からの、横浜市衛生研究所における第7週までのウイルス分離・検出数は、Aソ連型4、A香港型24、B型10となっています。全国の地方衛生研究所からの報告によれば、2月22日現在、Aソ連型39、A香港型311、B型176です。横浜市では今年より、定点医療機関からの届出様式にインフルエンザ迅速診断キット報告欄を設け、任意でご記入いただいております。現在までの報告数を図に示しました。合計数を比べると、A型：B型が約2.4：1で、当所での分離・検出の合計数の比2.8：1に近い値になっていました。

2月8、9日の2日間、横浜市内において、今シーズン初めて、2つの小学校で、集団かぜによる学級閉鎖が行われました。市内での集団かぜによる学級閉鎖は、2月22日現在、累計で8施設となっています。小学校が6校、中学校が2校で、中学校の1校が学年閉鎖、残りの7校は学級閉鎖です。

平成19年 週 月日対照表

第3週	1月15～21日
第4週	1月22～28日
第5週	1月29日～2月4日
第6週	2月5～11日
第7週	2月12～18日



<RSウイルス感染症>

12月はかなり多くの報告がありましたが、1月に入ってから、第2週の18人、第4週の15人を除き1けたの報告数に減少し、第7週は2人でした。全国でも、第5週以降減少しています。

<A群溶血性レンサ球菌咽頭炎>

第3週に急に増加し、過去5年と比べて一番高い値で増加していましたが、第5週の定点あたり2.29をピークに2週続けて減少し、第7週は1.52と、高い値が続いていた昨年よりも低くなりました。都筑区での発生が目立っていましたが、第6週以後は警報開始基準の4を下回っています。神奈川県(横浜、川崎を除く)は1.97、川崎市は3.70です。全国では、第2、3週と急激に増加し、第6週は2.62でした。

<感染性胃腸炎>

昨年末は、大きく流行しましたが、1月に入ってから、ほぼ例年並みでの横ばいが続き、第7週は定点あたり7.34です。区別では、戸塚17.2、緑14.8、旭11.8とまだ10以上の区が見られています。神奈川県(横浜、川崎を除く)は7.49、川崎市は7.48と、どちらも横浜市より少し高くなっています。

<伝染性紅斑>

第3週は定点あたり0.60、第4週は0.68と、ここ数年の中では高めの値が続きましたが、その後は減少傾向で、第7週は0.28でした。川崎市は0.76と高い値です。全国では、第3週の0.77をピークに少し減少してきていますが、第6週で0.61と、過去5年間の同時期と比較してかなり高くなっています。

<マイコプラズマ肺炎>

3か所の基幹定点医療機関からの報告に基づいているため、総数で比較しました。昨年はかなり多く、年間で92人の報告がありました。1月に入ってから、第2週に1人、第3、4、7週にそれぞれ3人の報告がありました。全国での報告は、過去5年間と比較してかなり多い状態が昨年から続いており、引き続き今後の動向に注意が必要と思われます。

<性感染症>

性感染症は、診療科でみると産婦人科系(産婦)の11定点、および泌尿器科・皮膚科系(泌・皮)の15定点からの報告に基づいて集計されています。

1月は、性器クラミジア感染症が定点あたり2.82と、12月より増加し、昨年の1月に比べてかなり高い値でした。他の3疾患については、大きな変化は見られませんでした。

平成19年2月7日のエイズ動向委員会委員長コメントで、平成18年年間報告(速報値)についても発表がありましたので、横浜市のデータと合わせて下の表に示します。全国では、新規HIV患者、新規エイズ患者、合計数の全てで、昨年までの速報値及び確定値と比較して、過去最高を記録しました。

	全国(速報値)		横浜市	
	平成18年	平成17年	平成18年	平成17年
新規HIV感染者(人)	914	778	18	18
新規AIDS患者(人)	390	346	11	10
合計(人)	1,304	1,124	29	28
検査件数注)(件)	116,550	100,287	4,432	3,601

注)検査件数とは、「保健所等におけるHIV抗体検査件数」のことです

【病原体定点からの情報】

市内の病原体定点は、小児科定点:8か所、インフルエンザ(内科)定点:5か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:3か所、の計17か所を設定しています。検体採取は、小児科定点8か所を2グループに分け、4か所ごと毎週実施し、インフルエンザ定点は特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。眼科と基幹定点は、対象疾患の患者から検体採取ができた時に随時実施しています。

衛生研究所から(検査結果の詳細は、次ページ以降に掲載されています。)

<ウイルス検査>

2007年2月に病原体定点から搬入された検体は65件(小児科定点から鼻咽頭ぬぐい液43検体、内科定点から鼻咽頭ぬぐい液20検体、基幹定点から気管吸引液、髄液各1検体)でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は気道炎28人、発熱7人、関節痛・筋肉痛3人、胃腸炎、結膜炎、下痢、嘔吐、腫脹各1人、内科定点は関節痛・筋肉痛13人、気道炎6人、発熱1人、基幹定点はインフルエンザ脳症1人でした。

3月7日現在のウイルス分離状況は、小児科定点の発熱患者1人からインフルエンザウイルスAH1型、小児科定点の気道炎患者8人、発熱患者4人、関節痛・筋肉痛2人、結膜炎1人、内科定点の関節痛・筋肉痛7人、気道炎患者2人からインフルエンザウイルスAH3型、小児科定点の気道炎患者4人、発熱患者2人、胃腸炎患者1人、内科定点の関節痛・筋肉痛4人、気道炎患者2人、発熱患者1人からインフルエンザウイルスB型、小児科定点の気道炎患者1人からアデノウイルス1型が分離されています。また、基幹定点のインフルエンザ脳症患者の気管吸引液検体からは、インフルエンザウイルスAH3型が分離されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

<細菌検査>

2月の感染性胃腸炎関係の受付は10検体で病原菌は検出されませんでした。溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体の受付は3件で、A群溶血性レンサ球菌が1件検出されました。また、髄膜炎患者のパートナーから1株が分離同定されました。